

追悼・笹井水輪二十九首抄

阿木津 英選

水底の苔の銚しころの間あわいより湧く水青き炎の如し 歌集『ふうせんかざら』

臍の緒を袈裟懸けにしてたわむれし十月十日を忘れて生まる

暁の声をあげ鳴くかけろかも趾おゆびひらきて土踏み締めて

羽衣のようなる尾ひれ揺らすとき金魚の背骨はつかに軋む

金峰山麓きんぽうざんに買いし紫の葡萄二ふさ三ふさを苞つと苴とに

柚人の手にぶらさがり自然薯は産土黒くつけて来にけり

燻し金燻し銀なる面面にまじりてアルミニウムな気分

一人負いひとり身ごもり家出せしことあつたつけ小倉に小雪

耳朶が水芭蕉のごと冷たくて尾瀬風情ふうしやうを受話器に聞けば

夏の夜の夢や玄海巻貝の卵囊咬みて鳴らすほうずき

七十はつくづく年寄り長病めば子にも諂いかねぬこのごろ

友ひとり思い出ひとつあれば足る九月茶杓の權先軽し

かしましき二百二十歳載せ走る白き車は姨捨山へ

年が明けて、締め切り日も過ぎたが、笹井さんの歌稿が来ない。三浦恒子さんにメールで尋ねると「原稿を書ける状態ではありません。今後ずっと書けないと思います」という。半信半疑の思いだった。

笹井さんは八雁創刊に加わったとき、七十五歳だった。(起床時に一錠を水にのみ下し七十五歳死にそうになし)へそそくさと茶碗を洗い手をふきてさてパソコンに礼れいしてすわる)、こころの浮き立つような歌に対する意欲が背後に流れている。

歌集『ふうせんかざら』の出版は、その年の十一月。跋文にわたしは次のように書いた。

「ともかく、機敏俊敏、才気煥発のきびきびとしたリズム感と、現実を見るほろ苦い視線とがないまざって、対象との距離が余裕を生み出し、そこに軽い

遠からず位牌のひとつとなるふたり古寺のしだれ桜見上げつ
恩寵の七つひかりも十字架も負わず七十路ふうせんかずら
腹割りて見せて親しげなるざくろ紗しやに包みたる別腹を持つ
凧の落としゆきたる黄金を独り占めしてあな竹箒
山里の櫟林の風涼し　どぶろく少しいただきまして

人ひとり烟となりてゆくころを阿蘇野のづか阜の竜巻きに遇ふ
九州のへその辺りにかがまりて汲む神宮の水の美うまさよ
耳に聞き眼に見るは身の外のことなり胸に心臓一つ

「八雁」

『ふうせんかずら』歌集謹呈やがてしてシンビディウムがりボンつけて来

白山羊と黒山羊の嗚呼はなうたが師走の街のポストへ急ぐ
散るはなの雁行橋かりゆきばしに並びにし十人の輩　いま亡き五人

花を捨て茶を捨てあれこれすてて来て残るひとつに手を焼きてをり
寄りて見る胸像阿南あなみ惟幾これちかの鼻先に垂れゆるる蓑虫

姑の植ゑし石路いしぢするも花びら散らず根も葉も丈夫
盆地町神社の下にちんまりと営む写真屋客まばらなる

お向かひは昔ながらの餅屋にて暮れの蒸籠せいろうに湯気白く立つ

笑いが生まれ出るのである。か
らくて、苦くて、渋い。」

たとえば「腹割りて見せて親
しげなるざくろ紗しやに包みたる別
腹を持つ」、調子よいリズムに
乗せられてさらりと飲み下ろす
が、このしたたかな穿った人間
観察の苦みはどうだろう。「耳
に聞き眼まなこに見るは身の外のこ
となり胸に心臓一つ」、これも
なかなかこたえる歌である。

大会や琅玕忌などで会うこと
があつても、笹井さんは奥ゆか
しくて、特別な会話を交わした
という記憶がない。それが残念
なようにも思うが、「胸に心臓
一つ」の心意気は、淡い交わり
の中にもしかと感じられた。

八雁七年間分の歌を読み返し
ながら、いきいきと気持ちのは
ずんだ日々が蘇って、ああ、よ
かった、と思わないではいられ
なかつた。
(阿木津 英)